
呪われた剣は竜の親不知 《wisdom tooth》

飛影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた剣は竜の親不知《wisdom tooth》

【Nコード】

N7403T

【作者名】

飛影

【あらすじ】

とある対象の監視任務でやってきた日本で天叢 薙は今までにな
い戦いに巻き込まれていく。ろくに情報も持たされぬまま、夜知
春亮という人物を追ってきた薙は自分の任務を果たせるのか？

電撃文庫のシーキューブを書いてみました。拙い内容になると思
いますがどうぞよろしく。
てかアニメ化ってなによ！？聞いてない！

キャラ設定

この作品はシーキューブとオリキャラのクロスです。しかしこのオリキャラは主人公ではなく脇役的立ち位置にするつもりなのでご注意ください。

名前・・・天叢 薙 （アマムラ ナギ）

身長・・・約170cm

体重・・・60kg未満

髪色・・・藍色

正体・・・天叢雲剣 （草薙の剣ともいう。名前もそこから引張ってきた。）

効果・・・“己”に降りかかる障害を“薙ぎ払う”

呪い・・・乙女の血を求める（しかし今は自分が戦闘等で流した分だけあればよい）

所有物・・・こっそり溜め込んでいる禍具が数点

所属・・・竜頭師団

日本古来の三種の神器の宝剣であったが八岐大蛇の伝承により裏では乙女の生き血を捧げるといふ邪教紛いの儀式を受けてきた。その頃から力を発し始める。源平合戦の壇ノ浦の戦いにて海に沈むも

入水自殺していく平家武者の怨念により自我を手に入れる。そのまま流され自分の価値を知らぬ人間に拾われ、その力で人々を傷つけつつ、人の手を転々としていた。あるとき竜頭師団に拾われて働くことを決めた。自分と同じモノ達や自分を受け入れてくれる人間が好きになつた為。

基本的に一人で行動し、あちこちに旅しては強弱様々な禍具を拾ってくる。それを組織に渡して金や一時的な自由を手に入れている。また禍具を集めて渡していけば自分を使わないと周りと話もつけているのだがこれは昔のように人間を傷つけないため。しかし実はかなり呪いは解けているが全く気付いていない。ちなみに題名の wisdom tooth (親不知)とは最初はパートナーを持たずフラフラしている。拾われた恩が分かっていない。自我を手に入れた時の持ち主の人間が誰か知らないなどの意味で細かい意味は違うが皮肉で付けられたもの。

とある気になる情報が組織の中を巡っていた。生憎、組織の者たちはそれぞれの件で忙しいため代わりを買って出た雑だがその情報とは？

キャラ設定（後書き）

恥ずかしっ！分からないくせに題名に英語書いちゃったよ恥ずかしっ！

キャラの設定も恥ずかしっ！もう死にそう・・・

第一話 接触（前書き）

少し短めですがご容赦を

第一話 接触

「日本か…久しぶりだ…。」

新築とわかる小奇麗な家の二階の窓を開けて外を眺める少年。仕事の事なんて綺麗さっぱり忘れさせてくれそうだと誰にともなく咳いている。しかし残念ながらそうもいかないらしく盛大なため息をすると窓枠に腕を乗せて視線を下げる。木の壁一枚で隔てられた向かいには少し古い木造の一軒家がある。

「ご丁寧な真正面とは…逆に怪しまれないかもな。」

不意にエンジンの音が響く、トラックが正面の家に停止すると男性がトラックから降りて荷台へ周った。そしてやけに重そうな四角い箱を持って家の玄関に立ち、その家のベルを鳴らした。出てきたのは自分より一つか二つは年下らしい容姿の少年だ。男性の会話に愛想笑いをするのを見て取れる。だが自分に関係する問題はそこではない『四角い箱』だ。なんともオカルトチックな感じの箱は少年に家の中に運ばれた。

「目標を確認。任務を開始する…ってね。」

そう一人ごちると下の階へ向かう。夕飯のために。

「では、転校生を紹介します。天叢くんです。」

「家の都合で転校してきました、天叢 薙です。よろしく願います。」

根は真面目そうだが少々影が薄い男性教員に紹介されて俺も自己紹介を適当に済ませる。クラスの人間はやはりというか必然的にこちらに注目していた。転校理由は親の事情とかでこれまた適当に話をつけた。ここは私立大秋高校。この学校へ入る理由は不明でただ命令状の中に含まれていたのだ。

「（いくらなんでも唐突過ぎる…。こんな所においても時間の無駄だろう。）」

「えと、では…その席へ。」

「あ、は…はいっ！」

不意に小声で囁かれたために声が上がってしまいが左隣が空いている席に着いた。欠席なのか、元からいないのか、出席確認のときに誰かがまだ休んでいるという話しが聞こえたので欠席だろうと分かったがちょっと変わった苗字だったために薙はすぐに忘れてしまった。

「よろしく！俺は…。」

「私は…。」

こんな調子で自己紹介をしてくるクラスメートに薙は対応に追われていた。適当に愛想笑いをしてその日は過ごす。そして放課後になると走って下校した。急に学校に入学すると、もう手続きは住んでいると一方的に連絡を寄越してきた組織にやはり一言くらいは文句を言いたかったのだ。しかしそれは郵便入れに入っていたエアメールによって黙らざるを得なくなった。

「まさか向かいの奴があの学校の生徒とはね…。けどそういう大事なことはもつと早く伝えてほしいな。」

こんな情報を渡されたのであればしょうがない。潜入任務のようなものだと割り切るしかなかった。でも不機嫌であることに変わりはなくいつもよりだ**い**ぶ早く寝てしまった。

「でも現状を打破してくれる訳でもないし、今度は対象の奴のクラスを探さなきゃならないし…。」

ぶつくさ言いながらも受けた命令の内容を思い出す薙。それは『日本に運ばれた禍具クラスとそれを受け取るであろう人物を監視すること。命令無しでの破壊や殺害、鹵獲や誘拐、戦闘や脅迫の一切を禁ずる。』というものだ。うちの組織の活動方針からすればそこまで気に掛けるものならさっさと奪ってしまえばいいものを、それよりさっさ

とあの家に押し入ればどうなのか？などと考えつつどんよりとした思考のまま家を出ようとすると郵便受けにまたエアメールが入っていた。今あけて読む気にはなれず、鞆にしまい学校へ向かった。

昼休みに教室を出て人を探す。相手はあの箱を受け取った少年だ。しかし何やらもめているように見える。そばにるのはオレンジの髪をお下げにして眼鏡をかけた少女でやたら胸がデカいのが特徴。そしてもう一人目立つ人物がいる。綺麗な銀髪を長く伸ばした少女だ。背はかなり低い所を見ると高校生とは思えない。事実、来ている制服がやたらブカブカしている。おまけに珍しいその容姿に野次馬が何人もいるので隠れる必要もなかった。オレンジのお下げの少女は真っ赤になったり青ざめたりと一人で忙しい。

「なんだありや？まあクラスは把握したし、放課後から仕事は再開だな。」

「どこいったんだ？まさか、帰ったとか？」

そして放課後。薙はというと完全に彼らを見失っていた。焦った薙は対象の少年のクラスへと駆け込み、先生からの言伝を受けたと偽って何処に行ったかを聞き出すと幸いにも外国から来た知り合いを案内しているとのこと。おまけにまだ帰ってはいないようだった。

「それは災難だったな。しかし、年頃の少女と同棲など馬鹿げている！」

「あなたもなかなかハンサムなタイプですな！これはもしかして三角関係ですか？」

「なに！？我が愛しのこのはさんは俺だけの…！」

なんだかえらい生真面目そうな女子とオレンジのショートofの元気そうな女子、それと短髪のちょっと頭が残念そうな男子が教えてくれたがだんだん暴走してきそうだったのでサッと退場した薙は階段の踊り場まで避難すると息をつく。そしてふと鞆を漁り、朝の手紙を開けた。あの少年の尾行も大事だが手紙の内容も気になる。そう考えたのだった。

「また変な指令は勘弁だぜ……あらら、これはまた…！」

「第一の問い、《今までどこにいたか?》に答えましょう。ソレは数百年もの間、廃城の隠し倉庫で眠り続けていました。だから結果として我々の目を逃れることができたのですよ。」

大秋高校の屋上。夕日は薄曇りの空の為に見えない。そしてその風はひどく肌寒いものがあつた。そしてそこに響く女性の声。貴族のように豪華なドレスに美しい金髪、妖艶な微笑み、そして真逆の印象を与える啞え煙草。そして、両腕を覆う巨大な腕部だけの鎧。奇怪な女性の笑みの先には一人の男子生徒と女子生徒と銀髪の少女がいた。

「なんですか?あなたは。」

謎の女性に気圧されながらも男子生徒は話しかける。彼こそ薙が監視対象としている少年だ。名を夜知 春亮という。

「春亮くん、下がってください!」

オレンジの髪をお下げにした女子生徒。彼女は村正 このは。彼女は急に現れた女性の剣呑な雰囲気を感じ取り、警戒を強めていた。

「わたくしは【蒐集戦線騎士領】という組織のものです。名前はピーヴィー・バロライ。“ゆらゆら人形《バランシングトリー》”とも渾名されています。ところで一つ確認を。貴方は夜知姓の方?」

「え?はあ、まあ。」

「夜知 崩夏と我ら騎士領はそのスタンスに置いて対立しており

ます。そして後ろにいるソレが発見されたのがそもその始まり。我々も調査に赴きましたが先を越されました。しかし今回はモノがモノ故に搬送された場所は突き止めました。」

「こいつの…ファイアのことか？」

春亮が後ろを振り向くと小柄な少女がいる。美しい銀髪を長く伸ばした小柄な少女は沈痛な面持ちで俯いている。

「そう。そして我ら蒐集戦線騎士領は呪われた道具の存在を赦さない。ソレは、禍具は人の世にあつてはならないモノ。故にわたくしは…その筆頭たるそれを、“箱型の恐禍≪ファイア・イン・キューブ≫”を破壊いたします！」

言うが早いかピーヴィー・バロライは疾駆を始めた。両腕に鋼鉄の塊をぶら下げているとは到底思えないスピードで銀髪の少女へと距離を詰める。

「春亮！？」

「春亮くんよけて！」

しかしファイアと呼ばれているその銀髪の少女は微動だにしなければ。ピーヴィーの腕がぶつかる直前に春亮が抱きかかえるようにして横へ跳び、辛うじて回避に成功した。ピーヴィーの振るった腕はコンクリートの床に突き刺さり、クレーターを形成していた。そして逃げるファイアを追いかけて振るわれる力はベンチや給水塔の壁を砕き、へしゃげさせ、穴だらけにしていく。人間離れた身体能力に辛うじて避けていくファイア。春亮は一つの可能性を持った。

「（あれほどの力：呪われた道具か？）」

そう考えずにはいられぬほどの威力である。そうしてフィアは巨大な鉄塊をかわしていく。しかし、やはり限界というものはやってくる。何度目かの攻撃で生まれた床のクレーターに足を取られたのだ。一気に迫る鋼鉄の剛腕が振り下ろされた時。

「悪いけどそこまでだ！」

後ろから響く声に振り返ったピーヴィーが見たのは両刃剣を振り下ろす雑の姿だった。咄嗟に鎧で受け止め後ろに下がったピーヴィーは苛立ちまぎれに舌打ちをする。

「どこの誰です？人の邪魔をするとは最高に糞クソですわね。」

「天叢 雑。あんたの邪魔をしに来たのさ。覚悟しろ、ピーヴィー・バロライ！」

雑は剣を突きつけるとそう宣言した。

第一話 接触（後書き）

いかがでしょうか？
できれば感想も待っています

第二話 人形との戦闘(前書き)

遅くなつてすいません・・・

第二話 人形との戦闘

キーン…

念の為に距離をとったピーヴィーは憎々しげに舌打ちをする

「人の邪魔をするとは…最高に糞クソです！」

「まあそう言うなって。こつちも仕事が出来なくなるんでね。」

割って入った薙は剣を肩に乗せ、ピーヴィーを睨む。銀髪の少女
フィアは春亮に引つ張られ、後ろへと下がっていった。

「理解できませんわね。なぜそんなモノを庇うのです？」

「あんたには関係ないよ。ただ、こつちの仕事がなくなるのは困
るからこうしてあんたの前に立ってるんだよ。それに…あんたやそ
の仲間を放っておくといわずれは俺の身も危ういんだよ。」

「まさか…ふふ、ふふふふアハハハハ！」

愚痴るようにそういう薙の言葉を聞いたピーヴィーは途端に笑い
出した。薙は眉をひそめ、春亮たち三人も息をのむ。

「ふふふ…そう、そうですか。貴方もその糞クソのお仲間でしたか！

ますますぶっ壊してあげたくなりました！」

「お仲間？何のことだ？」

「なあ、あんた！」

何を言っているのか雑には理解が及ばなかったようだが春亮が声を掛けるとチラチラと鎧女に視線を向けつつ、半身をむけて相手の次の言葉を待っていた。

「あんたも人化した禍具ワースなのか？」

「じゃあ、お前も！？」

「いや、俺は」

「どうやらよく知らない少年さん達にわたくしが教えましょう！」

「！！！」

続きを聞く前に聞こえた大声にその場の全員が一点を注目した。そこには鎧の留め金の一部を外してそこから出した煙草を啜えているピーヴィーが立っていた。豪奢なドレスを着ているものの侮蔑と嘲笑を織り交ぜた声と眼つきが酷くアンバランスだった。

「先程の質問の残りをお教えしましょう。簡単ですわ。人を虐殺した。辱め、断末魔を強い、怨嗟を求め、血を啜り、ただ殺した！何十人も何百人も何千人も！罪なき人間も罪ある人間も、男も女も子供も老人も平民も貴族も奴隷も学者も農民も商人も神父も娼婦も騎士も！」

「なに!?!」

「あ……ああっ……。」

薙は度肝を抜かれて愕然とし、フィアは頭を抱えて顔を伏せた。そんな顔を見たピーヴィーはさらにニヤリと口角を上げ、饒舌に語る。

「すべてを神のごとく平等に殺したのでしょうか?それが何を躊躇う必要がありますか?」

「やめろやめろやめろやめろ!好きでやっていたわけではない!私はただ使われていただけなんだ!」

「言い訳ですか、なんと最低チビなこと!これははっきり言ってさしあげたほうがよろしいですわね?第三の問い、《どんなモノなのか?》が残っておりますし。」

「やめろおおお!!!」

「箱形の恐禍。異端審問期に開発されたそれは、ただの、汎用拷問処刑器具ですわ。」

「!!!」

春亮たちは声を失った。薙も言葉が出ない。自分の監視対象がそんな大物であったなど知る由もなかったのだ。しかしその思考はすぐに打ち消された。

「危ない！」

春亮が叫んだのだ。薙がハツと前を見ると目前にまで迫った鉄塊が視界の殆どを占領していた。咄嗟に目を瞑る薙を襲ったのは脳を揺さぶる衝撃ではなく、一人の女の呆れの声だった。

「格好よく登場するのは良いですけど実力が伴わなければ恥ずかしいだけですよ？」

それはスカートをはためかせ、目の前に立っていたこのはだった。正直なところ薙は何が起こったのか分からなかったがあることに気付いた。ピーヴィーのドレスが裂けていたのだ。恐らくは何かの刃物で切り付けたかしたのだろう。だが問題はそれらしいものを彼女が持つていない点だった。

「あらまああらまあ！呪い臭い廃棄物がまだこんなに転がっていやがりましたか！しかしそれはこの快事をより一層引き立てるだけですわ！」

ピーヴィーが疾駆は開始し、このはも同時に動き出す。鋼鉄の腕と細身の手刀の応酬だった。あまりに速いために中々参戦する場面が見えなかったが時折きこえてくる金属同士がぶつかる不可解な音が混じるのを聴いた薙は確信した。彼女も人外存在だと。

「くうっ！」

「このは！」

ピーヴィーの一撃を受けて、このははまるでボールのように吹き飛ばされる。ガードは間に合ったようだがいかんせん質量差があり

過ぎたのだ。しかし、このはの背中を受け止めたのは硬いコンクリートでもフェンスの金網でもなく柔らかい誰かの腕だ。それは間一髪で滑り込んだ春亮だった。その後ろには春亮を支える薙もいた。

「悪いな。ちょっと出遅れた。あんたもありがと。」

「一人で受け止めようなんて無茶するね。」

呆れたように笑う薙に春亮は乾いた笑いを見せる。そして双方ともすぐに表情を引き締めた。

「何故だ…。何故お前たちは私を庇うのだ!？」

ファイアが引き絞るような声で問いかけてきた。それに最初に答えたのはこのはだ。

「言っておきますがわたしは個人的事情でやっているんです。ほっといてください。」

「俺もこの眼鏡っ娘と同じ理由だしちょっとムカついている。だからあいつをちょっとしばきたいな」と思ったわけだ。」

「まあ…俺は一身上の理由だけどあいつは早いうちに沈めておきたいんだ。」

「まあ皆いろいろさ。…このは、いくぞ。」

春亮はこのはの肩に手を乗せる。このは一瞬目を閉じるとその姿を消した。制服やスカート更には下着類までもが地面へとパサリと落ちた。春亮の手に残るのは黒光りする刀身の一振りの日本刀。鈍

く光るソレを春亮はゆつくりと、しかし隙無く構えた。そしてその刀から声が響く。

『私の名前は、村正このは。けれど……苗字で呼ばれるのは嫌いです。春亮くんは体を楽に、いつものように私が動かします。』

「へえ、妖刀と名高いあれか…だが先駆けはもらうぞ！」

薙は感嘆の声を上げるとすぐさま正面を向き、駆け出した。手にした両刃剣でピーヴィーに斬り込む。そんな連撃をピーヴィーは巨大な鎧の手甲で難なく弾き、その剛腕を振るう。数秒遅れて春亮も飛び込んできた。しかし二人による斬撃も鋼鉄の塊には分が悪いせいか大きく薙ぎ払うような攻撃で二人同時に飛ばされてしまう。

「硬すぎる…こんだけ打ち込んでるのに壊れないってアリか!？」

「こりやますます“特製品”の可能性が増してきたな…。おまけにこのままじゃジリ貧だぜ？」

体勢を建て直した春亮は鎧の頑強さに驚き、薙はボヤク。それに對してピーヴィーは何処までも不敵な笑顔を湛えていた。恐ろしく、おぞましい笑みだ。

「手は…無いこともない。このは、“アレ”…《交叉法》やってみるか？」

『やってみますけど少々時間が掛かりますよ。それとその貴方にも協力してもらいます。』

「俺にも!？」

『内容としては簡単です。それに必要要素はあと一つだけなんです。貴方はとにかく……。』

春亮とこのは何か閃いたようで薙に何かを指示している。それを悠長に待つほどピーヴィーは愚かではなかった。顔を歪ませ、猛進を始める。

「呑気に話をしている時間はありませんわ。塵共と塵の味方の少年さんは今すぐぶっ壊れやがってください！」

ドン！

「あぶっ！とにかくやるしかない……！勝負だピーヴィー・バロライー！」

紙一重で攻撃をかわし、薙はすぐに斬りつける。もちろん弾かれてしまうがそれでも薙は食い下がりに斬り込み続けた。ただ、さつきまでと違うところは相手の攻撃を必ずかわせるようなスタイルになっていることだ。振り下ろされ、なぎ払われ、ピーヴィーの直線的でありつつ防ぎようもない一撃をかわしては斬り続ける。

「甘いすわね！所詮はただの塵！」

「しまった!?!」

そのうち攻めきれずに苦戦を強いられているうちに薙は足をもつれさせ尻餅をついてしまう。不敵に笑うピーヴィーは止めの一撃を振り下ろした。その巨体故に繊細な動きのできない得物。だがその動きから生み出される破壊力はもう周囲の光景に目を遣れば嫌とい

うほど分かってくる。だが、逆を言えばその力を生み出すためにこそ、余計な動きはできない。自分に正面から迫るあの拳の動きさえも、もう何度も何度も見てきた。

「だから…もういいだろ？」

『上出来です！』

「行くぞ！」

「『剣殺交叉！』」

「鞘だったのか…あれ…。」

薙は一瞬だけ現れて夕日を反射し煌めいた一閃をどこか神々しささえ感じ、ガラガラと崩れる鎧を何処か遠い目で見ている。

第三話 曇天の搜索（前書き）

またも遅くなってしまいました・・・

第三話 曇天の搜索

暗雲が空を覆い、冷たい雨が降り始めた中でベンチの残骸に埋もれていた薙は春亮に起こされた。頭からパラパラと破片を落とすつ、薙は周囲を見回す。あの鎧が砕け散ったのを見届けた瞬間、急に意識が無くなり、ようやく今になって眼を覚まし起き上った。

『しつかりしてください！』

「おい！？大丈夫か！？」

「お、おう……。それより、ファイアって娘が居ないけど……。何処へ行ったんだ？っていうか何で俺、あそこで寝てたんだ？」

「それは……。」

『今とにかく中に入りましょう。風邪をひきますよ二人とも。』

このはの提案に従って屋上から退避し、階段の踊り場で息をつく三人。このはも今は人型に戻っていた。

「で、さっきの質問に答えさせてもらうよ。あんたを吹っ飛ばしたのは…ファイアだ。おそらくは剣殺交叉直後だろうな。実はあの女の鎧を破壊したんだが、あれは“ただの”鎧だったんだよ。」

「禍具じゃなかったってことか？だけど屋上を月の地表にそっくりにしちまったあの威力の説明がつかないぞ！？とても無事で…は…。」

言いかけた時、薙は思い出した。鎧が崩れた瞬間の露わになった腕を。不自然な赤黒いものが目立つ腕だったように記憶が残っていたのだ。そうなることを承知で腕を使い続けたのだろう。

「たしかに見えるようになった腕はひどい傷だった。だけどあいつは痛みが大好きだと言ってたからな…狂ってる！おまけに奴の血を見たフィアが錯乱を起こして俺たちに襲い掛かって来たんだよ。すぐに正気を取り戻したんだがどこかに行っちゃまった。」

「まああのヤジロベエみたいな奴に関しては人それぞれの趣味なんだろうな。しかし、スタンスとは裏腹に禍具の力に頼りがちな連中には珍しい奴だな…にしても、頭に固い感触が残ってるんだよなあ…。擬装型である箱を呼び出して吹っ飛ばされたってことか…。」

後頭部を擦りながらばやく薙にもはや呆れの目をしたこのはがため息をつく。春亮も乾いた笑いを浮かべ、立ち上がるうとしたが、すぐに呻き座り込んでしまった。それでも何とか立ち上がり、息をついた。

「春亮くん！？無理をしなしてください！そんなにしなくても私が助けになりますよ。」

「そ、そうか？なら出来れば今、助けて欲しいことがあるんだが…なあ？」

「え？…ああ、そうだな。これはかなり助けが必要だ。」

このはの申し出に気まずそうに相槌をうち、春亮は横目で薙を見る。話題を振られた薙もたどたどしい声で上を見上げつつ、若干二人とは別方向に視線を彷徨わせている。

「まっばだ…。」

「まっばだ…。」

「え？え？なんですか一体？」

慌てるこのはに雑は顔と視線をずらしたまま指を下に向け『下を見る』とジェスチャーをして、春亮は顔を赤くしてこのはの顔を見ている。このはは、まずジェスチャーに従い、顔を下に向けると春亮と同じように顔を真っ赤に変えて春亮を見る。

「つまり、まっばだかだぞ、と。」

「早く言つてくださいいいいっ！」

あっという間に屋上へと走り去ったこのはを見送り、二人は同時にため息をついた。

「眼福だ…。」

「このはに怒られるから言わない方がいいぞ…。」

数分後、服を着て降りてきたこのはは階段の上に腰掛けて水気を絞っていた。ややあって、雑が小さく声を出した。

「どうするんだ？ファイアって娘、放つとくわけじゃないんだらう？行先に当てはあるのかい？」

「もちろん放つとく訳にはいかない。でも当てはないんだよなあ。」

だからしらみつぶしに探すしかないな。まあちょっと青春を味わうと思えば軽いもんさ。」

「青春？」

いきなり突拍子もない単語が飛び出てきて困惑するのはと薙。しかしそんな二人に春亮はニツと笑う。

「どしゃぶりの中をマラソンなんてまさに青春時代にしかできないじゃないか。ゴールはギンギラ小娘の目立つ頭がゴール。簡単だ。」

「思い出作りですか…それなら仕方ないですね。私も青春を味わいましょう。」

「じゃあ俺も味わってみますか。のりかかった船ってやつだな。だからしょうがない。うん、しょうがないなこれは。」

春亮の言葉にやれやれと腰を上げたこのはに続き、尻を払いながら薙も立ち上がる。それを見るこのはの目には少しばかりの警戒の色が浮かんでいた。

「あの時から気にはなっていました。貴方の目的が分かりませんね。とりあえず先程襲ってきた人物とはあまり友好的ではないようでしたね？なら少なくとも敵対しているあといくつかの組織の者という推測が正しいようですか？」

「その考えは大当たりだね。でもまあ今その話題は二の次じゃないかとおもっけど。人手が居るんでしょ？手伝っよ。」

痛いところを突かれたとでもいうのか、このはは不審な動きをすれば容赦しないと釘を刺し、春亮と共に階段を下りて行った。残された薙はゆっくりと息を吐き後を追って階段を下りて行った。

それから三人は手分けをしてあちこちを走り回った。路地裏やゲームセンターなど行きそうなところに春亮が当たりをつけて探す。消息はまったくつかめず終いだっただ。そして駅前の広場にて小休止を兼ねた情報交換を行っていた。

「こんなに探しても居ないなんて…。電車とかなんかの交通機関でも使われたか？」

「いや、それはないはずだ。」

「まあたしかにその可能性はありませんね。」

「どうしてだよ？」

自分の意見が全くの一考の余地も無しにスツパリと否定されたことに驚く薙は理由をたずねていた。

「答えは簡単。あいつ金を持ってないもんだからそれは無い。お

まげにきつと乗り方すら知らないだろうしな。だから走り回れば何とかなるはずだ。もう一回探すぞ！」

「じゃあそこら辺の運転手さん脅して移動するってことも考えられるんじゃないの？」

「……………」

「いや、あの、冗談だぞ？ 冗談。さ、さあ探そうじゃないか！」

……………

「誰だよこんな時に！ …… いんちよーさん！？ …… え！？ 教えてくれ、今捜してんだ！ 落ち着いたら説明するから。ちよつと、今説明するのは難しいんだ。ああ、ありがとう。」

知人、又は級友らしく、何やら話し込んでいる。しかし『いんちよーさん』なる愛称の人物など知らない薙はひたすら首をかしげるしかない。ちらりと横のこのはに視線を送るが会話の内容が気になるのかジッと春亮を見つめている。

「海か！」

突如大声を上げた春亮は携帯電話を仕舞うと走り出した。冷静に後を追うこのはに、少し出遅れて追いかける薙。全力で走る三人は

傘も差さずに走り出したためにあっという間にズブ濡れになっていた。

ザーザーと降りつける雨の中、海岸の端っこの小さな防波堤が海に伸びていて、その中ほどに春亮、このは、そして薙の三人は居た。数分前にフィアによく似た特徴の少女の情報を手に入れて、歩き去った方向へとやって来たその終点がここだ。周りには人影などなく、声も聞こえない。ただ雨の音が響くだけ。何処にもいない。ただそれだけが次の思考へ直結するのはあつという間だった。防波堤の先端で春亮は崩れ落ちた。そのすぐ後ろでこのはと薙も俯き、言葉が出なかった。

「ん…？」

ふと薙が何かに気付いた。暗い色の海に浮かぶ場違いで綺麗な色彩の四角い何か波に揺れていた。ただのゴミかなにか。薙にはそんな感じにしか目に移らない。ただちよっと視界の端に移ったので

小さな声といっしょに顔を向けたただけだ。その刹那、春亮が立ち上がった。

「このは。これを頼む。」

「え？ちよつと春亮くん!？」

春亮はポケットの中をまさぐり、このはに携帯電話と財布を手渡す。

「忘れてたよ。まずあいつは重い。それに馬鹿で単純だ。それに恐らくここだろうって証拠もあるしな。だから…行ってくる!」

言つが早いか春亮は駆け出し、海へと飛び込んだ。二人は海面へと目を凝らすともう姿が見えなくなっていた。

「なんて無茶を…!」

このはは顔色を真っ青にして狼狽えている。この悪天候で水中の視界は最悪だ。おまけに服を着ての水中での運動はかなり困難である。ミイラ取りがミイラに、などということもありうるのだ。

「ああもう!これお願いしますね!」

「うお!??」

我慢ならなくなったのか、このはは雑に春亮から預けられた携帯電話と財布を持たせると後を追いかけて飛び込んだ。雨でダメにならないように携帯電話をすぐにポケットに仕舞いこんだ雑はその場で待っているとすぐに海面に泡がいくつも浮き上がり、それに一瞬

遅れるように春亮とこのは、もう一人はあの銀髪の少女ファイアだった。どうやらうまく見つけ出したらしい。薙はすぐに言葉を掛けてやりたかったのか口を開くがこのはが春亮に対して軽率な行動への説教が開始され安堵と呆れの間あたりのため息で留め、引き上げるために手を差し出すことにした。

「まあまあお二人さん。夫婦喧嘩は犬も食わないと言うし、風邪ひく前に出てきなよ。」

「ああ悪い、サンキュ。」

「ちょっと待ってください。その諺、合ってるんですか？」

「知らない。」

ジト目で睨んできたこのはの指摘をあっさり受け流し、最初になり無理をしたであろう春亮を引き上げるために手を伸ばす薙の横から別の腕がスツと伸びてきた。それはこのはの方へ延びると同時に声も聞こえてきた。

「まさか…明日説明すればいいや、などと思っていたのではないだろうか夜知？」

「いんちよーさん……。」

「誰？」

声の主は薙が放課後に春亮たちの居場所を聞き出した一人であるあの長い黒髪でえらい生真面目そうな女子生徒だった。

「放課後あつた君か。自己紹介するよ、私は上野 錐霞。夜知のクラスの委員長をやっている者だ。よろしく頼む。」

「あ…俺は天叢 薙。今日転校してきたんだ。よろしく。」

なんだか不思議な空気の中、自己紹介を終えた二人は握手をした。お互い右手を海に浮かぶ二人に差し出したままなので左手での握手であった。そしてそのあと、早く引き上げてほしいとこのには注意を受けてしまっていた。

第三話 曇天の搜索（後書き）

やっぱり原作を微妙にバラしつつ、作り上げるのって大変ですね

第四話 露呈

海から三人を引き上げた薙と錐霞。そして引き上げられた春亮とこのは、そして今はまだ意識の戻らないフィア。五人は錐霞の提案で近くの防風林へと逃げ込んだ。それだけでも雨ざらしの時は天と地ほども違った。さらに雨も弱くなり、このままならばそう時間もかからずに止むはずだ。フィアをゆっくりと横たえさせた春亮は腰を下ろすと小さく呻いた。激しい戦闘や搜索、それと悪天候での水中活動が原因だろう。

「ああ、きつい。運動不足がたたってるのかな。」

「運動不足は関係ありません！無茶もいいところです！」

「すみません……。」

このはに一喝されて小さくなる春亮をみて薙も含み笑いを隠せなかった。

「けど本当にキツかったよな。だからしょうがないよ。」

「貴方は何もしてなかったでしょう!？」

「おいおい！言っとくけど濡れた服着た人間持ち上げるのって、とっても大変なんだぞ!？」

「君たち、そんなに言い合いしては休めるものも休めないよ?」

「スミマセン…。」

ちゃっかりと『働きましたアピール』をした雑の小言を聞き逃さなかつたこのは、そして仲裁をする錐霞。少しばかり和みの生まれた空気は頭上の不審な音に掻き消された。

「……。」

「うお!？」

春亮の目の前に一人の人間が“降りてきた”。真つ白な髪の毛をざんばらにしている。そして顔は以外にもまだ幼いものだった。腰のあたりから紐のようなものを伸ばして蓑虫のように垂れ下がっている。なかなか心臓に悪い光景だ。

「私は蒐集戦線騎士領の後方支援員、オーグジラリ “ミイラ屋”マミーメーカーと呼ばれている。ファイアイン・キューブ “箱形の恐禍”について提案がある。今回の我々の目的は件の禍具のみ。故に、こちらがこれから出す条件を呑めば危害は加えない。」

謎の蓑虫怪人は騎士領の人間と名乗ったところで春亮はフィアを引き寄せ距離を取り、このはは錐霞を背中に隠すように位置取りをする。しかし雑は座つたまま目だけを少しだけ動かして一瞥しただけだった。そしてその怪人はフィアを春亮たち自身の手で破壊するか、無力化して引き渡す。またはフィアの擁護を行わないという条件を突きつけ、さもなくば命の保証はしないと脅しをかけてきた。もちろん春亮たちはその条件を呑まないと宣言するがその怪人は激昂も嘲笑もなく、ただ、言いたいことは言つたという雰囲気です。春亮の話の聞いていた。

「一応、連絡先は渡しておく。えつと…。ぜろきゅーぜろの…。」

連絡先の準備だけは怠っていたためか微妙に可愛らしい場面も見せていたが。そして携帯電話の番号を書き写した紙を春亮に渡す。

「色好い返事を。待つ。」

「まあ待てよ。オーグジュラリ 後方支援員。いや、マミーメーカー “ミイラ屋”」

用は済んだということの木の上へと昇り始めたその人物を薙は呼び止めた。その眼は少しけだるげに半開き程度にしか開いていなかった。睨んでいるというよりこれから面倒な野暮用を片付けなければいけない者がするような眼だ。

「もう少し、今度はこつちの用事に付き合ってはくれないか？敵の戦力は…：少ないほど好ましいからな。たしかあんたには直接的な戦闘能力はなかったよな？まあそれが分かってるからって手は抜かないけどさ。」

「ちょ、ちよつと待ってくれ！」

事実上の宣戦布告を宣言した薙はゆっくりと上着のポケットの中へ手を伸ばす。しかしそこで手を止めた。春亮が間に割って入ったのだ。

「直接戦う力がないならこれ以上無駄に戦うこともないんじゃないか？」

春亮が間へ割って入ったことで薙はポケットから手を出した。その際に怪人はあつという間に姿を消してしまった。

「いいんですか？春亮くんには悪いですがたしかに敵なのは間違
いありませんし、続けるのは貴方の自由だったんですよ？」

ややあつて、このはが薙に問いかけた。薙は肩を竦めつつ振り向
く。

「まあここで一般人に血を見せるのも良くないと思っただけだし、
後方支援員の一人や二人くらい沈めるのはいつでもできる。それに
もしかしたらあのヤジロベエ女、近くに潜んでるかもしれないしな。
あんな化け物、一人じゃ手に余る。そう思っただけさ。」

「しかし大変なことになっちまった。あんたらはどうするんだ？」

「もちろんあんな条件は呑まないに決まってるさ。」

雨が止みんだ暗い道を街灯だけがポツポツと照らす中、春亮たち
は徒歩で家路についていた。ちなみに雫霞も一緒である。さすがに
何度も異常現象などに居合わせたためにまともな説明を受けなけれ

ば帰らないと宣言されてしまい、しょうがなく夜知家へ案内しているのだ。このはが家族が心配するのでは？と、提案したが一人暮らしであると言い返されあえなく撃沈していた。裏道を通っていることもあり、人影は全く見えない。未だ目を覚まさないフィアを春亮が背負い、歩き続けていた。このはが代わろうとしたが結局はずつと春亮が背負い続けている。

「それにしても重いな。本体に関係してるのか？」

「そうですね。たしかに若干の影響はあると思いますよ？」

「なんの話だ？本体とはなんだ？」

「そ、その話も、また後で……。」

小さな呟きも錐霞は聞き逃さない。冷や汗をかくそんな春亮の耳に小さな声が聞こえる。か細い声だった。

「重いと……言つたな。二度目だぞ、このハレンチ小僧め……。」

「事実だ。腰が抜けるほど重いぞ。」

「レディに対してなんとという暴言だ。……それより降ろせ。分かっ
つておるだろう。私は……。」

「それ以上喋るな。もし喋ったら俺の呪いを受けるぞ？それもズバリ、胸がこれ以上成長しなくなる呪いだ。」

「なにおうー！」

だんだんファイアの声が大きくなる。後ろの三人はしばらく顔を見合わせ、二人の成り行きを見守っていた。

「そもそも俺は呪いの影響を受けない体質だし、お前は親父の客だ。何度逃げても何度でも連れ戻すからな。」

「生意気なハレンチ小僧め。こうなったら私のもう一つの呪いを受けてみるがいい。」

ファイアは何やら自信ありげに言うと、何やらモゾモゾと春亮の背中で身じろぎをしている。それは背負っている本人はもとより後ろの三人も何をしているのかは分かった。春亮の体に回している腕や足をさらに密着させたのだ。このはが小さく呻き声を上げた。

「ふふふ……。これで貴様に風邪という呪いを食らわせてくれる。」

「そりゃたしかに怖いな。人が一年に一度はかかる呪いだ。」

他愛もない会話を楽しみつつ、春亮たちは家路についていた。

「……………」

「……。」

「（重い！主に空気が重い！夜知春亮！いつたいこの状況、どうしてくれるんだ！？）」

今、一同が集まっているのは夜知家の居間だ。家主の春亮たちはもちろんのこと錐霞と薙も客として座っており、それぞれの前にはカレーとサラダが用意されていた。しかし、今この場で楽しく夕食を楽しもうという空気は1？も有りはしなかった。このはと錐霞の壮絶なジト目。その対面に座り冷や汗をかく春亮とその隣に座っているために意識せずとも体を強張らせる薙だった。その視線が春亮に集中的に注がれている。否、突き刺さっている。

「うむ。大体事情は分かった。フィアさんとこのはくんは実は人間ではないこと。先刻の人間はフィアくんを狙う組織の一員ということ。それと夜知が最低最悪の変態だということだ……。」

「それはもういいだろ！？」

さらに眼光を鋭くする錐霞と精一杯の弁解をする春亮。なぜこのような空気になっているのかという少し時間をさかのぼることになる。

『すまないな、このはくん。タオルありがとう。』

『いえいえ、いいんですよ。ところで貴方はいいんですか？』

『ああ、もう乾いてるからな。』

夜知家に上り込んだ後、フィアは先に風呂に入ることになり錐霞はタオルだけ借りて濡れた髪の毛や服を乾かしていた。薙はもう乾いたと言って、出されたお茶を啜っていた。そして髪を拭き終えた錐霞もテーブルの前に座り、お茶を飲む。

『さて、あとは夜知から話を聞くだけか？』

『あれ？その本人はどこいった？』

『脱衣所でしょう。濡れた服を纏めて洗ってしまうと言っていましたから。』

最後の役者が揃うのを待っている三人の耳に何か物音が響いた。ドスンボタンとなにかが暴れる音と、ここにいらない二人の声。訝しんだこのはが一人で脱衣所へ向かった。あの怪人が突きつけてきた条件には実は明日までという期限があった。なら夜が明けるときるか日付すら変わっていない今は襲ってくることはないだろうということで緊張感はなかった。しかし途端に静まり返る家内のせいで錐霞はゴクリ、と生唾を呑んで緊張感を浮かばせ、薙は湯呑みを置いてこのはが出て行った戸口を眺めていた。

『わああああん！ふ、不潔ですうううう！』

突然響く悲鳴と共に居間に走り込んできたのは。何故か半泣きで錐霞に縋り付く。そして泣きじゃくりながら自分が見たものを話した。内容は、自分が脱衣所に入った時には春亮は上半身は裸で、ズボンは反脱ぎ状態。先に風呂に入っていたはずのフィアは全裸で春亮のズボンに手をかけていた。まったくこの大事な時になにをやっているのかと雫は頭を抱えた。そこへ遅れてやって来た春亮をジト目でにらんだ錐霞はおもむろに携帯電話を取り出す。

「もしもし？通報したい男がいるのですが…。」

「わー！わー！いんちよーさんストップ！」

突如恐ろしい行動に出始めた錐霞を大声で制する春亮。錐霞は無言で携帯電話を仕舞う。どうやらフェイクだったようだ。そしてそのまま、微妙に重たい空気で夕食作りが始まった。

そんな経緯があり、春亮が禍具等の説明を終えた後も重苦しい空気が続いているのである。しかし最初に比べれば幾分マシなようではあるが。

「おっと、気づいたらそろそろこんな時間か。いんちよーさん、送っていいんか？」

「いや、大丈夫だ。一人で平気さ。それよりもファイアくんを狙っている敵は一体どうするのだ？」

「それ、俺も気になるんだけど！」

錐霞の問いに便乗する薙。

「そうなんだけど、相手の場所も分からないから手の打ちようがないんだよな……。」

「何を言っておる。あいつは腕を片方失っておるのだぞ。とてもまともに戦うことなどできまい。」

「あいつ腕無くしてるのか！？ならあのとときに糞虫怪人をゴフウ！」

自身が気を失っている間に動きがあったことに今更気づき、立ち上がりかけた薙にこのは無言の拳がみぞおちにクリーンヒットした。いきなりの事に目をしばたかせるファイアと声にならない悲鳴を上げ悶絶する薙。一転してカオスな空間へと様変わりしてしまった。もちろんこののは行動に理由はある。ミイラ屋が条件を提示してきた際にファイアは目を覚ましていなかったなのでその時の事は知らない。ならばこのままにしておくのが最善と考えたのだ。薙は少々考えが足らなかつたにしてもとばっちりに近いものを受けてしまったのだ。そんな一同を見つめて苦笑を浮かべた錐霞が腰を上げた。

「ではそろそろお暇しようか。邪魔したな、夜知。」

「おう、いんちよーさんも悪かったな。またな。」

「じゃあ俺もお暇するか。御馳走様〜。」

「貴方は待ちなさい！貴方には聞きたいことがたっくさんありますからね。」

錐霞は春亮の見送りを受けて帰っていき、薙は帰ろうとしたところをこのはに捕まえられた。

「いやホラ、最近物騒だし、そろそろ帰りたいなーなんて……。」

「どうせ近所なのでしょう？……お隣さんとか。」

「なんで知ってるんだ!？」

痛いところを突かれてつい声が上ずる薙。しかし……。

「え？」

「ぬ？」

「やっぱり。」

「ヤベ……。」

盛大に自爆してしまった薙であった。驚く春亮とフィア。してやったりといった顔のこのは。そして顔を青ざめさせる薙。その一瞬だけたしかにその場の空気は止まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7403t/>

呪われた剣は竜の親不知《wisdom tooth》

2011年11月14日01時43分発行